

説教 『終末と日々の過ごし方』 山本 護 牧師  
聖書 詩編 18:26~31 / マルコによる福音書 13:32~37

寒いけれども日は長くなり今日から四旬節(受難節)。3月25日の受難日までキリストの御受難を聖書に聞いていこう。イエスは終末を譬える(マルコ 13:32~37)の中で「目を覚ましていよ(13:33,34,35,37)」と四度も語っている。くり返される「目を覚ましていよ」という言葉。十字架前夜、幾度命じられても眠りこけてしまう弟子たちの姿が思い起こされる(14:34~41)。出家してイエスに従った使徒でさえ、十字架が近づけば眠りこけてしまう。はたしてそんなことを私たちが受け止められるのか。腰が引けてしまう前に、「目覚め」とは何か、「目覚めている」とはどのような状態なのか、御言葉に聞きたい。

「その日、その時は誰も知らない。天使たちも、子も知らない。父だけがご存じである(13:32)」。ゆえに「気をつけて、目を覚ましていなさい(13:33)」とイエスは言った。「その日」とは世の終末。しかし破局ではない。イメージは正反対で、民が切望する「神の国」が到来する日のこと。ただ「その日、その時は誰も知らない」。天使も、イエスでさえも知らない。カルトがかった教会は、終末や裁きを特定し、恐怖を煽って信徒を操作するが、彼らには御言葉よりも人間の意図が優先している。とはいえ、「いつ来るか分からないから気にしない」と居直ってしまうこともまた人間の作為に違いない。

その日を待望しつつ「目を覚ましている」ことは緊張や委縮ではないけれども、改めて背筋を伸ばすような身の処し方ではあろう。イエスは譬えて言った。「それはちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ、門番には目を覚ましているようにと、言いつけていくようなものだ(13:34)」。すなわち私たちは、与えられた仕事と責任を誠実に果たしながら一日一日の始末をつけていく。神の息吹(聖霊)が吹き抜け、消え入りそうな私の火種を燃え立たせる一日、もう一日。

現代、混沌は拡散し、悲惨は拡大している。また個々人の生と死もはかなくなっているように思う。こんな時代にさえ折々の希望はあるが、そんな刹那的な平穏ではなく、普遍的な真の希望「その日、その時」は必ずやって来る。それはいつか、誰にも分からない。「父だけがご存じである(13:32)」。私たちはこの父を、キリストによって「アッバ、父ちゃん」と呼ぶ(ガラテヤ 4:6)。だから分からなくとも大丈夫だ。その時は、父ちゃんが何とかしてくれる。ゆえに今は落ち着いて一日一日に始末をつけ、ここに到来し始めている「父ちゃんの世」に仕え、その恵みを周囲に、次世代に手渡していこうや。

「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい(マルコ 13:37)」。これが伝道ではないのか。誰もが神を「父ちゃん」と呼ぶことができ、奪い合いと死の拘束から解き放たれること。こつこつ誠実に働き(13:34)、誰もが目を覚まして主人(キリスト)の帰りを待ち続けられること。そのために「父ちゃんの子」である私たちは、イエスが「すべての人」に語った福音を宣べ伝えている。

「すべて御もとに身を寄せる人に、主は盾となつてくださる(詩編 18:31)」。一日一日は私たちの隅々を愛してくださる父に守られる。「主よ、あなたはわたしの灯を輝かし、神よ、あなたはわたしの闇を照らしてくださる(18:29)」。恐れに光を当てて解き放ち、日々の仕事を意味あるものに輝かし給う。



【おまけのひとこと】

地図がなくても旅はできる 人の日々がそうであるように どこでも一日が終われば陽は落ちる  
気象図や六分儀 神が「その日」を知っておられると分かる道具 私の位置が分かる人間の道具